

異質な発想から LOVEが生まれる

村田 昭治

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：今年の3月22日東京のサントリーホールで行われた先生の「最終講義」には、約1700名の卒業生や財界の方々が集まられたそうですね。

村田：慶應義塾でマーケティングを学んだおかげで、諸先生方、企業のトップマネジメント、先輩、友人、後輩と実に多くの方々に巡り合うことができました。集まってくださったのは、挑戦することの大切さやオリジナリティーの大切さ、人を思いやる気持ちなどほんとうに多くのことを教えてくださった方々だったので、非常にうれしく思いました。

私がこの日、一番言いたかったのは、青春時代にもった、真理を一途に追求しようという気持ちの大切さなんです。社会に出てからも、青春のときにもった真理の探求心や善意、誠意、好意、友情や恋愛を心の中に蘇らせて、それらを一生もち続けてもらいたいということです。

現実的には、青春時代にもっていた未来への意気込みだとか活力だとかは、処世術という名のもとに萎えてしまうものです。だんだんポジティブなものが見方ができなくなり、妬み、嫉みが生まれ、人を叩いたりしてしまいます。だから経営者というのはまた打たれ強くなくてはいけなし、叩かれて磨かれるという意識をもつ必要があるというような話をしたんです。

こういったことを私が青春時代に読んだ倉田百三^{*1}も書いていますが、いま、大企業のトップを務める多くの人が、自分も学生時代に倉田百三を愛読したと言われています。そういう人生を哲学するものを、みなさんお読みになっていたんですね。この時期、そういうふうに哲学したり思考しめいたりすることが足りないから、標準化したり横並びになって社会の体質が弱くなったのではないかという気がします。

佐多：アメリカのコロラド州アスペンにアスペン研究所というのがありまして各界の様々な人を集めてリーダーシップトレーニングを行っています。私も10年以上前に、2週間のエグゼクティブ・セミナーに参加したのですが、それがプラトン、アリストテレスの古典をひもとくことから始まるんですね。本を読んで自由、平和、平等、正義、愛などのキーワードを中心にディスカッションして、普段の仕事から離れて人間として基本

的なあり方を考えましようというものです。日本でも小林陽太郎氏（富士ゼロックス会長）が会長になられ、今年4月に日本アスペン研究所^{*2}がスタートしました。

村田：それは非常にいいことです。私が月に1回診察にうかがうドクターは、病気の話はしないんです。唯識論^{*3}を勉強していますね。医学のスペシャリスト、経営のスペシャリストは多くいるが、それに人間性や芸術性を掛け合わせて、真のプロフェッショナルが生まれるのではないですか。私はこれからはメタサイエンスの時代だと思います。これが経営学だ、何学だなんて言っているのはだめな時代がくるでしょう。

慶應義塾でもいつも思っていることは、学部を割るな、必修科目をなくせ、ということです。必修科目を作るから平均的な学生が生まれてくる。選択科目ばかりにして、お医者さんも、例えば経営の考え方だとかエコロジーの考え方だとかを勉強したら変わると思っていますね。

佐多：立花隆さんが最近、日本の大学教育の問題はリベラルアーツ（一般教養）をしっかりとやらないことだと批判されていますね。

村田：慶應義塾の場合なども、商学部の大学院にくるのに専門科目の試験があります。それでは芸術をやった人は入れない。アメリカやヨーロッパがいいのは、どんな学科を卒業しても経営学にいくことができることです。大学で音楽をやって、大学院で経営管理がやれます。入ってからやってくださいというのが外国。これだからおもしろい人間、クリエイティビティが育つんですね。

私は大学に入ったときは文学部ですよ。小説家になりたいくて、小説書いては三田文学に持っていった。そうしたらある先生に「君、人生にはいろんな道があるよ」と言われた。これダメだってことでしょう。3年のときに経済に変わって、そこで経済価値論をやって新古典学派を学びました。商学部ができるというのが転部して、マーケティングをやったら専門家がだれもいないからハーバードへ行っていこうと言われる。人生どこでどう変わるかわからない。

若いときに避けなければならないことは、同



村田 昭治 / むらた・しょうじ
1932年台湾台北市生まれ。55年年慶應義塾大学経済学部卒業、ハーバード・ビジネス・スクールに留学。商学博士。71年に商学部教授となり、今年3月末に退任した。我が国マーケティング論の第一人者。現在は慶應義塾大学名誉教授として、講演、執筆活動、テレビ・ラジオ出演など幅広く活躍が続いている。

質の中に居続けることです。横とだけつき合っていないで、男性、女性、先輩、後輩と異質集団を作って自分の異質化を図ることが大事です。日々、非凡化する努力をすること、そうしたら瞬間瞬間燃えて生きることが出来ます。

佐多：企業もこれからは組織ではなく、個人、個性が主役の時代ですね。

村田：そうですね。いい会社になっていくには、異質な人たちが集まっているのがいいんです。議論が分散していくでしょう。集金力だけではだめです。日本では一心不乱に勉強することがいいことだとされていますが、私は「多心乱々^{たしんらんらん}」がいいんじゃないかと言っています。たくさんの心をもって乱れ乱れてやるところがおもしろい。飛び級はオタクを作ります。周辺のことを勉強できない。遊びが足りない。

まずいろいろなことに興味をもって何でも知りたがる生活を送っていると、気がつかないうちに数え切れないような、ものを見る視点が生まれてきます。そうすると、おもしろい生活、「多心乱々」な生活ができます。つまり多様な視点でものを見ることができるようになるんですね。

自分の仕事のことでだけでなく、周辺科学を勉強している社員のいる会社は放射線状に広がっていきます。クリエイティビティが育つからです。異質な世界に興味をもてる姿勢があれば、何事にもアレルギーが出ない。あの人は私と考え方が違うから嫌いという日本人は多いですね。あの人は考え方が違うからおもしろい、そこにLOVEが生まれる。異質な発想からはLOVEが生まれて、同質な発想からはLIKEしか生まれない。仕事においても、生きることにしても、ものをよく見ること、認識すること、よく聞くこと、臭いをしっかり嗅ぐということが大事だと思います。

私はハーバードのビジネススクールで、マーケティングというのは、企業が物を売ったり買ったりするためにあるのではなく、「人の生きて



いく幸せの総和を大きくすることに貢献する”
こと、生活の豊かさや未来の質の高い生活を追求することなのではないかということ学びました。それでマーケティングをこれから先ずつとやっていこうと決心したんですね。企業（病院）が利益をあげるということは何かといえば、“人に感謝される総和”だから、利益をあげようと思う企業（病院）には利益はこない。感謝される総和を大きくしようと思ったら、それが売り上げに変わります。考え方を商売に変えるっていうのはたいへんなことですね。技術力も同じ。もっているだけでは何もならない。それをどうやって経営力に変えるか。経営力に変えるということは、人々のニーズに応じて喜ばれる、それが大切なマーケティングミッションじゃないですか。それを果たしていれば、売り込む企業（病院）ではなくて慕われる企業（病院）になります。

企業の若い人たちに考えてもらいたいことは、会社の文化とは何か、言葉を変えれば会社のDNAは何か。このDNAに惚れこんで、新しいDNAを作ろうという気合いがなかったら、会社はやっぱり活力が足りなくなります。

佐多：最近、ご自身クリスチャンで、作家であり今では日本財団の会長（前会長は笹川良一氏）をなさっている曾野綾子さんが、日本は魂の教育を怠ったつけを払わされている、つまり、人生の基本を考えず対症療法ばかりやってきたせいで、今いろいろな問題が起こっている、と言っておられます。先生はどう思われますか。

村田：大学の教育でも、人の教育でも、今一番思うことは、エリートや人材を育てることが教育の目標では決まてないということです。42年間教壇で、人物を育てたいと思ってやってきました。人物を育てるとは、一人一人のもっている個性をいかに伸ばしていくか、そして社会に喜んでもらえる貢献をできる人間を育てるか、ということです。ネットワーキングを行える人間を育てることです。ところが日本の教育は資格、資格で、資格をとるために学校へいきます。学位、肩書きを得るために学校へいくというのが大きな間違いです。それから先生方が教育好きでなければならない。教え方を勉強して

おかねければなりません。

教育というのは、学生の能力を肯定することから始まるんですね。私は棟方志功*4が大好きでずいぶん勉強したんですが、志功は小学校5年までは図工が丙だった。小6でそれまでの先生が辞めて新しい先生がきて、志功の絵を見て、わからない、俺を越えてる、っていうんで甲をつけた。それで棟方志功は変わったんです。私はそれ知って先生になっちゃった。

私は学生のすべてを否定しませんでした。授業中携帯電話がかかってきても、うるさいと言わない。“いい知らせだったら代わるから貸せよ”と言います。

携帯といえば、電車の中でだれかにかかってきたら、きょうは健作ちゃんとゆう子ちゃんがデートするな、ハチ公の前で待ち合わせてる、何食べに行こうか相談してる、ああ、予算はいくらぐらいだ、といろいろわかって勉強になるんですね。だから私は携帯電話をうるさいと思ったことがない。社会を全部否定するだけじゃつまらない。

授業に遅れてきたら、“タベ遅かったんだろう”“4時まで本読んでました”“早起きは早死にのものだから朝寝坊してよかったな”そういうものの見方が今の日本人は不得意になりましたね。お母さんがきて、“英語ができない”“それではきっと数学はできるんでしょう”“数学もだめです”“いや、いずれ新しい芽がふきますよ、楽しみです”“そういうものの見方が足りないから、私は日本という社会がつまらないんだと思います。

魂と言っていとか、精神と言っていとか、あるいは自分自身の背骨と言ったほうがいいのかわからないですが、今感じることは、自分が存在感をもつこと、自分が存在感を作るんだ、という気概があまりに足りないですね。それから読書が足りない。だから言葉、ボキャブラリーが貧困ですね。ゴルフに行っても“がんばってください”“お疲れさまでした”ばかり。疲れにきたわけじゃない。だれ一人、いいゴルフをお楽しみください、とは言わない。

みなさん、言葉を大事にしていますか。言葉の必需品だけで生きないでください。せっかく言葉というすばらしい文化があるのだから、ぜいたく品の言葉をふんだんにもっていただく

さい。言葉は文化の表現です。言葉は教養の現れです。

全体的に読書量が減っていますよね。本を読むということは、違う世界を自分の世界に引き入れることで、世界が大きくなって広がります。その喜びが、勉強する喜びなんですね。私は学生が、学ぶことってそんなにおもしろいんですか、と聞くと、いや学ぶというのは言葉は悪いかもしれないが、麻薬のように楽しいもんだ、やめられなくなるんだ、と答えます。苦しくてやっているわけじゃない。学生だけではなく、いくつになっても、これはすべての人に続けていっていただきたいですね。

主要著書

『マーケティング・システム論』（有斐閣）
『活性経営の知恵』（プレジデント社）
『マーケティング』（プレジデント社）
『人心の時代』（プレジデント社）
『人間経営の知恵』（プレジデント社）
『創21』（プレジデント社）
『心と感性の経営』（世界文化社）
『美的企業への道』（プレジデント社）
『評判が市場を創る』（日本経済新聞社）
『愛と“ときめき”の経営』（世界文化社）
『新マーケティング・ソフト』（世界文化社）
『村田昭治のマーケティング・ハート』（プレジデント社）
『毎日快晴』（世界文化社）
『こころときめくマーケティング』（国元書房）
『マーケティング・フィロソフィー』（国元書房）
『村田昭治マーケティング研究への旅』（国元書房）
『マーケティング・ゼミナール』（国元書房）
その他多数

*1倉田百三（くらた・ひやくぞう）：(1891-1943) 戯曲家、評論家。広島生まれ。西田幾太郎に傾倒し、宗教文学に独自の境地を拓いた。戯曲『出家とその弟子』『布施太子の入山』他。『白樺』誌上で活躍し、その評論、感想などをまとめた『愛と認識との出発』は、戦前の旧制高校生の青春必読書となった。

*2日本アスペン研究所：東京都港区六本木5-11-16
(財) 国際文化会館内 Tel 03-3470-3211

*3唯識論：仏教の術語。自己およびこの世界の諸事物は我々の認識の表象に過ぎず、認識以外の事物は存在しないとする説。参考：横山紘一著『唯識とは何か』『わが心の構造』（春秋社）他

*4棟方志功（むなかた・しこう）：(1903-75) 版画家。青森生まれ。人間本来の素朴な情念、原始の呪縛術、宗教性、広大な宇宙観を、大画面の版画にダイナミックに表現した。戦後は、普遍的人間感情の表出として国際的にも高い評価を得、各種の国際展で賞を受ける。70年文化勲章受章。

帰ってきた結核

DOT*——積極的に患者を見つけだそうとする医師たちの試み

HIV、O-157大腸菌、エボラ出血熱など、1970年代になって新しく出現した伝染病が大きな問題になっている一方で、もうとくに鎮静化したと思われていた伝染病が復活することもある。結核はその代表格で、その再燃の一因は高齢化にともない再発性の結核が増えたことである。すなわち、青年期に感染はしたが発病せず胸の中に菌をもったままの人々が、高齢になって体力、免疫力が低下して発病するのだという。1960年代までは国内で毎年50万人近い患者が発生していた結核。現在でも毎年約4万人が新たに発病、約3000人が死亡している。

空気中に菌が飛散・伝播する結核は、患者が自ら病院にかけ込むというより、医者が町に出ていって治療をすべき、公衆衛生的要素が非常に強い疾病である。

今回は、日米の結核治療の第一人者である先生方にお集まりいただき、それぞれの経験をふまえ結核に関する最新情勢について語っていただいた。

★ ★ ★

司会：WHOの報告によれば、結核は現在全世界の成人死亡原因のトップで、95年から10年間に3000万人が死亡すると予測されています。ほとんどがアジア、アフリカでの流行ですが、先進国でも大都市を中心に小流行が起っています。ロム先生、80年代後半から90年代初頭にかけて米国で結核が再燃しましたね。

ロム：ええ。実はCDC（米国疾病制御予防センター）は1980年に、米国の結核は西暦2000年までにほとんど絶滅できるだろうと宣言していたんですね。ところが85年に罹患率の減少が鈍化し、80年代終わりには減少が止まり、90年代初めに今度は増加しはじめました。その劇的な逆流の原因として、結核を診ていた公的医療施設が予算の関係で廃止されたこと、また、麻薬常習者が増え、HIV感染が蔓延し彼らに結核が流行したことが挙げられます。この麻薬常習者の多くは少数民族すなわちアフリカ系、ヒスパニック系で、それが大都市での流行につながったのです。大都市の結核の25～45%がHIV感染症を合併していました。

司会：森先生、日本では結核に何か変化が起きていますか？

森：第一に日本の結核対策の現状は欧米先進国に比べてはるかに遅れています。わが国の結核罹患率は欧米に比べて4～5倍高く、欧米の第二次大戦直後の状況に近い。欧米先進国が70年代に年率10%の割合で急速に結核を減らしたのに比べて、わが国では年率3～4%に留まりました。

第二にわが国の結核ではいくつかの疫学的な変化が起こりつつあります。患者はこれまでの高齢者から、免疫学的な弱者（コンブロマイズドホスト）に移りつつあります。すなわち、糖尿病や人工透析、胃癌や胃摘後、けい肺症の患者さんに合併することが多くなりました。また、貧困層にも結核が流行しています。ホームレスの人たちばかりでなく、中小企業で働いている人たちにも結核は多くなっています。健診が受けられないなど多くの面で不利だからです。

第三に米国と同じように結核の専門医が減少したことも注目すべきかもしれません。最近では結核の診断が遅れたことによる重症結核が数多く報告されています。日本では幸いにも外国人の患者は1.2%を占めるにすぎません。アメリカでは30%だと聞いていますが。

ロム：そうですね。ニューヨークでも外国人の結核が増加しています。92年には18%が外国生まれ、97年にはそれが46%にも達しています。サンフランシスコでは70%が外国人です。主として中国、フィリピン、ベトナム、メキシコなどで、ほとんどが観光ビザで入国し長期滞在している人々です。

司会：合衆国ではHIVと結核の合併は依然として多いのでしょうか？

ロム：ニューヨークでは結核の50%がHIVとの合併例です。HIVの患者層が変化しつつあり、ゲイの感染者が減少しつつある一方で、マイノリティの麻薬常習者の感染が増えています。特に女性の割合が増えています。我々は非常に強力な抗ウイルス療法と抗結核療法の併用療法を用いていましたが、副作用の問題があるので最近これを改め、最初に抗結核療法を行い次に抗



ウィリアム N. ロム MD, MPH
ニューヨーク大学メディカルセンター

ウイルス療法を行うようになりました。

司会：永井先生は東京病院でHIVと結核合併例を経験されていますが、現状はどうですか。

永井：現在全国で70例が報告されています。東京病院では15例の合併例がありました。日本人11例、ミャンマー2例、タイ1例、韓国1例です。11例が粟粒結核で、平均CD4数が118/mm³でした。注目すべきことは、ほとんどの患者が結核の診断前にHIV感染を知らなかったことです。また、幸い耐性結核は1例だけで、みな抗結核療法がよく効きました。

司会：森先生、開発途上国でのHIVと結核の合併はどうですか？

森：限られた一部で合併率が高く、タイのチェンマイで50%、インドのある地域では約20%です。

ロム：サハラ砂漠以南のアフリカでは依然として増えているようですが、正確に統計を取ることが難しいようです。

司会：ニューヨークでは93年以降、結核が劇的に減少したと聞いています。その原因は何ですか？

ロム：DOT*がニューヨークでの結核罹患率減少の原因と考えられます。DOTは92年に結核の標準治療として指定されました。非常に助かったのは連邦政府が貧困層のDOTに予算を拠出したことです。この計画は劇的な成功を収めました。89年に、通常6カ月の治療コースを完了していた患者がたったの10%だったのに対し、2～3年後には90%になりました。

また、CDCは予算を拠出して、保健所のケースワーカーを使って患者の発見に努めDOTを普及させました。患者は週2～3回病院で投薬を受けます。来院した患者にはサンドイッチやジュースなどのご褒美を出します。また、DOTは患者が見つかりやすいように病院の入り口近くに設けます。患者には約束の日に来るように地下鉄のトークン（切符）をわたします。患者はそれを、通って売ってしまうんですけれどもね。（笑い）



森 亨 / もり・とる
結核予防会結核研究所長

森：合衆国におけるDOTは非常にうまくいったと思います。合衆国でDOTをやっているのは政府が公的医療機関ですね。私立の医療機関がこのプログラムに関わることはないのですか？

ロム：政府は私立医療機関でも贈り物のプログラムを実施しています。しかし、現実には私立機関の医者は患者を公的機関に紹介します。そちらの方がうまくいくことを知っているからです。

森：DOTをやっている公的機関はどこに所属していますか。

ロム：市の保健局です。ニューヨーク市はCDCから直接予算をもらい、政府が指示を出します。つまり、州政府を飛び越えてバイパスするシステムになっています。政府は結核の問題には公共性と緊急性があると判断したわけです。

司会：森先生、DOTは開発途上国でも治療の主流となりつつあるのですか。

森：開発途上国ではDOTS (Directly Observed Treatment with Short course) と呼ばれています。一般的にアジアはアフリカに比べて遅れています。中国ではうまくいきました。WHOではこの3～4年、インドとバングラデシュで大規模なDOTSを行っています。タイでは、DOTSではない独自のプログラムを進めています。また、ミャンマーでは経済的な理由で困難です。リファンブシンを買う金がないけれども国情から外国の援助が受けられません。しかし、カンボジア、ネパール、ベトナムではうまくいっています。

ロム：非常に心配なのがロシアで、今多くの都市で小流行が起こっています。医療機関が化学療法に未だあまり信頼をおいていなくて、DOTSよりも外科手術を好んで行うからです。

司会：日本でも横浜の一部でDOTSをやろうとしていると聞きましたが。

森：非常に限られた地域です。政府があまり介入していないという点で、合衆国のDOTSとは



倉島 篤行 / くらしま・あつゆき
国立療養所東京病院

非常に異なりますね。唯一の例外は東京都で、山谷地区では人口10万に対し1000人以上の罹患率があります。ほとんどの患者が強制的に入院させられますが、何人かは10日ぐらいで逃亡してしまいます。そこで都ではそういう患者を説得して診療所へつれていきDOTSを行うのです。

ロム：ニューヨークでもハーレムに人口10万対500以上という流行地があります。ニューヨークは92年に公衆衛生法を改訂し、治療を拒否する患者を強制入院させることにしました。ベルビュー病院にはそういう患者を収容するベッドが24床あって、病室は外から鍵をかけることができます。排菌しなくなるまで病棟に拘束するのです。それから、ゴールドウォーター病院へ転院させ、さらに治療を行います。そういう患者の多くはアルコール中毒や麻薬中毒、家庭崩壊など多くの問題を抱えています。

司会：ところでロム先生、合衆国の薬剤耐性結核はその後どうなりましたか？

ロム：91年に耐性結核がピークになってニューヨークで500例以上のケースがありましたが、96年には100例まで減少しています。ほとんどが、アイナー、リファンブシンに対する耐性です。多剤耐性結核では、エチオナマイドとニューキノロンに注射剤を加えたセカンドラインセラピーが行われます。

ベルビュー病院では、83年から93年までに173例の多剤耐性結核に対しこのセカンドラインセラピーを行い、HIV陰性の患者で70%、HIV陽性では10%が治療しました。多剤耐性結核の50%が再発性ではなく、人から人へ伝染したものです。また、院内感染の症例も多くありました。90年代初め頃は隔離病棟などの設備がなかったためです。90～92年の間に6カ所で院内感染が起こっています。

司会：倉島先生、日本ではどうですか？

倉島：日本は合衆国とはだいぶ状況が違います。少なくとも一割に耐性の結核は77～82年の間5.3%でした。92年では5.6%ですから、ほとんど動いていない。東京病院では91年の耐性結核



永井 英明 / ながい・ひであき
国立療養所東京病院

は4.6%でした。こうした耐性結核の患者に治療して菌が陰性化したのは、3カ月で17%、20カ月で68%でした。

森：治療レジメンは何ですか？

倉島：ニューキノロンを中心とした治療です。

司会：耐性結核の院内感染についてはいかがですか？

倉島：不法就労の外国人の間で多剤耐性結核の流行が起こり始めています。

森：現状では少ないのですが予断を許しません。貧困層が増加しつつあり、そこに結核が流行するからです。耐性結核の流行を防ぐためにまずやるべきことは、病院の検査体制を向上させることです。第一に薬剤感受性テストを正確にやれるようにすること、次に多剤耐性結核の治療を普及させることです。現在では、限られた病院でしか行われていません。

司会：本日は貴重なお話をありがとうございました。結核は現在も世界で増え続け、依然として人類最大の感染症です。しかし診断や治療の進歩には目をみはるものがあります。本日指摘されたいろいろな問題が解決される日もそう遠くはないでしょう。

ロム：日本でも合衆国でもこれらの問題点を解決するために重要なことは、結核研究に予算を拠出し研究者を育てることです。

司会：まったくその通りですね。どうもありがとうございました。

(1998年5月27日東京大学医科学研究所クレストホールに於いて)

★

*Directly Observed Treatment. 医師や看護婦の目の前で結核患者に服薬してもらう治療方法。最初の2カ月間は連日行い、次の4～10カ月は週2～3回投与する。

感染と人間（12）

中田 光

平成の千早城

平成8年の夏に起こった病原性大腸菌O157による食中毒は、死者12名、患者5000名以上を出し、日本中を恐怖に陥れた。しかし皮肉にもこのことがきっかけになって、それまで旧時代の遺物のように思われていた細菌感染症学が息を吹き返し、学会は活況を呈した。国も漸く動いて、国立予防衛生研究所を国立感染症研究所と名称を変えて急ごしらえの感染症研究体制をスタートさせた。医科研の中でその存在すら忘れ去られていたわが微生物株保存施設にもわかに忙しくなってきた。O157ばかりでなく、他の食中毒原因菌であるサルモネラ、黄色ブドウ球菌、カンピロバクターなどの分譲依頼と問い合わせがひっきりなしで、8年の夏までに保存菌株のデータベースを作り終えていた私は、誠に不謹慎な話だが、「神風吹く」と心の中で叫んでしまった。製薬会社からの共同研究の申し入れもあり、アルバイトの人が増えた。また、夏から北里大学呼吸器内科のドクターで恩師の田中寛先生（感染と人間（3）に登場）のご子息である田中直彦先生（写真1）が客員研究員として研究室に加わった。留学時代から温めてきた肺胞蛋白症の病原因子の研究を田中先生と開始することとなった。O157や抗菌菌を培養し、抗菌剤の効果を調べるというアルバイト的な研究を請け負い研究費を得て、標準菌の保存と分譲のシステムを整え、老朽化した設備を少しずつ改善し、余力でもって研究を進めていくという体制ができて、孤独な闘いという閉塞感は次第に薄れた。私は密かに微生物株保存施設を「平成の千早城」と呼んで、機が熟し、捲土重來の時まで、勝たずとも負けない戦をしようと心に決めた。

それでも、心の中には何かしっくりいかないものが残った。本来、国家が力を入れなければならない病原菌の保存と分譲の事業を何故、私が今アルバイト研究をして支えなければならないのだろうか？こうした不満を込めて、赴任してから1年間の成果を事業報告として所に提出した（すでに甲所長から乙所長へ代替わりしていた）。しかし、施設が所属する感染免疫グループの大先生方からは「中田君は先端研究から立ち後れている」という評価をいただいた。先端研究とは一体なんだろう？医科研で行なわれている研究を見渡すと、確かにテクノロジーは新しいものを用いているが、どれをとっても米国の追従ばかりで、これぞわが国のオリジナルと言



写真：渋谷中央ライオンズクラブの例会にて。著者は中央、右どなりは牟田梯三さん。

中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。東芝中央病院内科勤務、米国ニューヨーク大学ペルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手。

えるものがないのである。択一式の受験教育に毒された没個性の人達が欧米の一流誌を読んで血眼になってやった研究という印象を得る。むしろ、独創的な研究は地方の国公立大学で細々と育てている。わが国の科学研究が危ういのは、脆弱な地盤の上に高い塔を築こうとするからで、その基盤の弱さゆえに十分機能できないまま、しばらく経つと流行が変わるので、また別の塔を築こうとする。そんなことの繰り返しである。標準菌の保存と分譲はいつの時代にも重要な感染症研究の基盤なのに・・・。

染谷さんとの出会い

O157の脅威が日本中を吹き荒れていた8月のある日、朝日新聞科学部のM記者から取材の申し入れがあった。前岐阜大学医学部教授の藪内英子先生がO157の件でM記者から取材を受けた際、是非訪問してみなさいと施設を指名してくださったのである。若く精悍な風貌のM記者は、施設長の金ヶ崎先生と私の話に熱心に耳を傾け、物置のような施設と老朽化した機器、特に例の冷えない極低温冷凍庫を見学していった。

数日後、朝刊の3面に極低温冷凍庫の前で凍結菌株のバイアルを持っている私の横顔が掲載された（写真2）。「細菌保存充実ほど遠く—O157禍の一方で」と題した記事は、わが国の細菌研究者の層は薄く、研究を支える基盤整備が後れており、特に必要な標準菌の保存は東大医科研も阪大微研も非常に少ない予算と人員で運営されていると報じたものだった。両施設とも改善要求を出しているが、国は不要不急扱いということも書かれていた。これで、医科研の対応も変わっていくだろうと思っていたら、中からではなく、意外な所から反応があった。

施設の窮状が朝日新聞全国版に報道されて2日後に、渋谷中央ライオンズクラブ会長の染谷賢治氏の訪問を受けた。眼光するどく、全身からエネルギーを発散させているような方で、新聞記事を読んでじっとしていらなくて来られたという（写真3）。私は、施設の活動を説明し、老朽化した設備をご紹介します。染谷さんは、「へえー」と感嘆することしきりで、「日本の病原菌の保存と分譲がこんな貧しい施設で行なわれているのはおどろきだねー」と仰って、ライオンズクラブで何かお手伝いできることを考えましょうと約束し



写真1：田中直彦先生

てくださった。染谷さんは、「お国のため」だとか「義を見てせざるは勇なきなり」という言葉を口癖にしている幕末の志士のような方である。長年、都区議会議員を務めておられたが、現在はライオンズクラブの会長としてボランティア活動をされている。

それから、1、2ヵ月間にわが微生物株保存施設は、染谷さんがお連れした様々な方面の人達の訪問を受けた。私は、施設を案内し、現状をありのままにご説明した。10月になって、文部大臣官房をされているK都議会議員が訪れた。K議員は文部大臣に施設の改善をお願いしてみたらどうかという。「えー、そんな大それたこと出来るんですか？」と言ったものの、もう医科研所内での改善要求は万策尽きているといった感じだったので、大臣がこのことに関心を持ってくれたらどんなによいだろうと思った。

こうして、染谷さんとK議員の勧めにより、文部大臣宛に嘆願書を書き、それに施設改善の道を賭けてみようかという気になった。

けんこんいつてき
乾坤一擲の手紙

その手紙は、以下のような一文だった。

小杉 隆 文部大臣殿

わが微生物株保存施設の現状について

東京大学医科学研究所

微生物株保存施設助手

中田 光

東京大学医科学研究所微生物株保存施設は、昭和47年に設立され、病原細菌の標準株（性質が明らかな細菌）を保存し、全国の大学や国公立の研究所、地方自治体の衛生試験所、病院の検査室、検査学校などからの要請を受けて菌株の分譲を行なっている施設です。わが国では、公的には他に大阪大学微生物病研究所に同様の施設があるのみで、これら2施設に保存されていない病原菌を手に入れたとした場合、欧米の保存機関に問い合わせで発送をお願いし、税関審査のために沢山の書類をそろえ、場合によっては空港まで受け取りに行かなければなりません。（中略）



写真2：朝日新聞記事

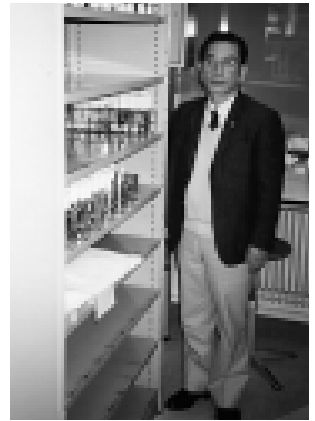


写真3：染谷賢治さん

細菌の研究や教育、検査を行なう場合、陽性コントロールとなる標準株や治療効果を調べるために過去に流行した菌株が不可欠ですが、その保存や分譲の体制を整えようとする動きは皆無といってよいと思います。わが微生物株保存施設にしても定員は助手1名のみで、旧式の設備でなんとか運営している状態です。特に菌の保存に不可欠な極低温のフリーザーは何時故障してもおかしくない旧式のもんです。（中略）

この現状を打開するために施設長の金ヶ崎教授（細菌感染研究部教授と併任）と何度も所に対して施設の改善を要求しました。しかし、所の対応はこれまで極めて冷淡でした。私は悩んだ末に、高校時代の先輩で医療機器メーカーの社長に頼んで医療器の治療研究のための書類書きのアルバイトをさせてもらい、奨学寄付金を国庫に入れてもらいました。そのお金でパートの人を雇い、平成7年度末より、8ヵ月間かけて保存菌株をコンピューター入力し、既に約2000株の情報を瞬時に引き出せるようにしました。それをもとに、他機関へ分譲可能な約1200株のリストを作成し、刊行しました。

しかしながら、私は今でも何故、公共のためにやっている仕事に対して十分な公的援助が受けられないのか、この重要な事業を支えるために何故私がアルバイトをしなければならないのか甚だ納得がいけないものがあります。現在、医科学研究所が力を入れている遺伝子治療やヒトゲノム解読プロジェクト（ヒトの全遺伝子の構造を明らかにするプロジェクト）は次の時代の医学の発展のために必要なものです。しかし、現在起こっている治療や予防可能な感染症に対応していくのも我々の重要な任務ではないでしょうか？

文部大臣の視察

その手紙は、K議員から大臣秘書に渡り、さらに小杉文部大臣の目に触れることとなった。K議員を通じて《大臣はこの問題に関心を持っており、一度視察したいが、今は忙しい。いずれ折を見て訪問したい》という旨のお返事を頂いたが、間もなく、例の住専の問題で内閣と国会が大荒れに荒れて、音沙汰がなくなった。私は、ここまでやってくださった染谷さんとK議員に感謝しつつ、大臣が私の手紙に目を通してくれたことに満足した。2ヵ月、3ヵ

月が過ぎ、年が明けて、私自身すっかりこのことを忘れてしまった。

5月7日。雲一つない五月晴れのその日の朝は、何となく胸騒ぎがして、いつもよりも30分早く出勤すると、留守番電話の伝言を知らせるランプが点灯していた。録音再生のボタンを押してわが耳を疑った。染谷さんからの電話で、今日の午後、大臣が視察に来られるという。「大変だ！文部大臣が視察に来られます」と教授室に駆け込むと、金ヶ崎施設長も驚き興奮した様子だった。まず、乙所長にこのことをお知らせしなければならないと仰って電話をされた。しかし、受話器を置かれた施設長はひどくご立腹の様子だった。文部大臣が本日視察に来ますと言うと、所長は「そんなはずはない。ゲノムセンターの視察に来ることになっている。私は忙しいんだ」と言って電話を切られたという。そういえば、2、3日前からゲノムセンターへの道が綺麗に掃除されていたなと思った。

頭の中がパニックになった。私の普段着といえば、ワイシャツに薄手のチョッキ姿である。家に電話して、一張羅の背広を家内に持ってきてもらうことにした。それから、大臣が施設を見学されるとすれば、お茶ぐらい差し上げなければ失礼だ。しかし、施設には100円ショップで買った、しかも端が欠けた茶碗しかない。私は、ポケットマネーをはたいて茶碗と茶托のセットと高級和菓子を買って行った。それから、全員で廊下と部屋中の掃除が始まった。いくら老朽化した施設とは言っても清潔にしておかなければ、正論も通らぬであろう。大臣にどのように窮状を訴えたらよいのか、そのことを考えただけでも胸の鼓動が高鳴った。午後1時半頃、ライオンズクラブの染谷さん、早乙女さん、鈴木さんが応援に駆けつけた。染谷さんは長年の都区議会の経験から、「こういうことの成否は、一瞬の駆け引きで決まる」と仰り、玄関前の車寄せでタバコを吹かしながら大臣一行を待っていた。午後2時半頃から、構内のあちらこちらに何処からともなくSPが集まり、危険物がないかどうかチェックし、盛んに無線で連絡を取っていた。染谷さんはそのSPの一人一人に名刺を配り、「本日の大臣の視察の目標は微生物株保存施設です」と説明して回った。SPの中にはすでに視察の目的をご存知の方もおられたという。午後3時半、大臣一行が到着した。大臣は下車するなり、染谷さんを見つけて、「おい染谷、こんな所で何しているんだ？」と声をかけられたという。大臣は都区議会議員時代の

染谷さんの知人だったのだ。大臣は所長の案内で東大総長らとともに会議室に入り、医科研の沿革について説明を受けた後、視察のため、多くのSPや随行員とともに冷蔵庫やロッカーが並んだ廊下を歩き始めた。染谷さんはその先頭を歩き、SPにこちらですと施設の方へと誘導した。医科研側の予定には微生物株保存施設の視察はなかったで、一行の後方を歩いていた所長や教授連はさぞ驚いただろうが、狭い廊下なので行く手を遮ることが出来なかったのだろう。大臣一行は染谷さんが案内する方にどんどん進んでいった。

小杉文部大臣は「この研究室はO157をやっているそうだが・・・」と仰りながら、沢山のSPや随行員とともに部屋に入ってきた。たちまち、狭い実験室は20名以上の人で立錐の余地もなくなり、大臣にお茶と和菓子を差し上げるという当初の計画が、全くナンセンスであったことに気づいた。染谷さんは「ここは、標準菌を全国に分譲している重要な施設です！」と大声で仰った。タイミング良く、技能補佐員の安達さんが、P2(病原微生物を扱う部屋)で分譲依頼のあったO157を植え継いでいたので、私は大臣をご案内し、「このように全国から分譲依頼のある菌を培養しております」と説明した。教授の一人は、「なんで菌株なんかを見せなければならぬんだ！」と言い、みな怪訝そうな顔で遠巻きに一部始終を見ていた。そこに、知らせをうけた施設長の金ヶ崎先生が人混みをかき分けるようにして駆けつけ、菌の保存室に大臣をご案内した。金ヶ崎先生は例の冷えない極低温冷凍庫を指さして、「この冷凍庫は大事な菌が保存されているのですが、十分に冷えません」「この人は、中田君といってアメリカでエイズを研究していましたが、今は菌の保存と分譲をしてもらっています。少ない予算で頑張っています。後継者がいなくて、彼に辞められたら困るのです」と畳み掛けた。大臣は保存室の古びた冷蔵庫、凍結乾燥器、リノリウムの所々剥げた床、ペンキが落ち錆びついた扉を一通り見渡し、「ここは、ひでえなあ！」と感想を仰り、SPとともにゲノムセンターへと向かわれた。この間、2分ぐらいだったろうか？私には、この時間が無限に長く感じられた。そして、大臣一行が立ち去った後も、暫く立ち尽くし茫然としていた。冷静だったのは、染谷氏だ。彼は、ゲノムセンターへ向かわれた大臣を追いかけて、「大臣！」と呼び止めた。小杉文部大臣は「わかってる。予算だろ」と仰った



写真4-1：改修前



写真4-2：改修後

という。

「聞いてないぞ！」

ところで、視察の折、大臣一行の後方で烈火のごとく怒り、「聞いてないぞー！」と怒鳴っている人がいた。乙所長だった。驚いたことに、所長は大臣の視察の後、大臣秘書に抗議の電話をしたのである。夜になって、それでも治まらない所長は、金ヶ崎施設長を所長室に呼んで始末書を書くように迫り、委員長会で問題にすると仰った。当然のことながら、施設長は強く反発した。5月7日の朝になるまで、文部大臣が本当に視察に来られるなんて誰も（私自身も）信じなかったわけであるし、知らせをうけて真っ先に施設長は所長に連絡したのだった。ただ、所長は不幸なことに大臣が施設の視察に来るという金ヶ崎施設長の言葉を信じなかったのだ。

その頃、私は一人施設に居て、ひたひたと湧きあがる感動を噛みしめていた。赴任してからのつらかった思い出が走馬燈のように駆けめぐった。研究費がなくて掃除ばかりしていた日々。ドライアイスでかしこ悴む手を電気ストーブで暖めながら凍結菌のバイアル1本1本の情報をコンピューターに入力していったこと。教授連に何度も施設の窮状を訴えても無視され続けたこと。みんなこの施設を見に来ることさえなかった。予算が付くとか付かないとかは二の次だ。何よりも施設の窮状を文部行政の頂点にいる方に見てもらった。もう、教授会も文部省もこのことを知らないとは言えないだろう。私は勝ったのだ！

数日後に開かれた委員長会で大臣視察の件も施設長の責任問題も誰一人として口に出さなかったが、この事件を契機に施設の改善は徐々に進んだ。所の予算で凍結乾燥装置を修繕し、P3実験室（病原性の強い菌を扱う実験室）のエアフィルターを新品と交換し、例の冷えない極低温冷凍庫は故障を契機に最新式のバックアップ装置付きのものに替えることが出来た。その後、私と染谷氏は衆議院文教委員T議員のもとへ施設改善の陳情に行き、平成9年の暮れに晴れて特別事業費の配分が認められた。それで、念願の施設の改修を行ない、現在に至っている（写真4）。

苦難さえ誇りに思う

医学に憧れ、大学を再受験して、医者になって、沢山の患者と

出会い、やっと臨床に慣れたと思ったら、今度は研究の面白さへのめり込んで、研究を続けたいばかりに苦勞の多い環境にいて、気がついてみたら、40歳を過ぎていた。人が見たら、なんて無駄の多い、取り越し苦勞の人生だろうと思うかもしれない。しかし、よくよく自分が辿ってきた道を振り返ると、もし、過去に戻ったとしてもやはり自分は同じ選択をしただろうと思うことがある。何故かと言うと、人生の節目節目において、私は組織よりも人間を、拘束よりも自由を選んできたからである。だから、自然に自分を拘束しようとする組織や上司から離れていき、自由だが苦勞の多い、よるべない世界に入っていくってしまう。

自由であるがゆえにまた、絶えず葛藤がある。何故なら、私は自由でありたいが、同時に孤独になりたくないからだ。それゆえ、人の苦勞を背負ってしまうこともある。そう思って自分の周囲を見渡すと、気が合う友人も先輩もまた恩師も、みんな「自由でありたいが、孤独になりたくない」志向の強い人達であることに気がついて、おかしくなった。

つまり、私の人生も周囲の環境も友人も、単なる偶然の結果ではなく、私という人間性の根源と密接に繋がった必然なのかもしれない。40を過ぎたあたりから、そのことに気がついて、必然の結果として湧いてくる苦勞を享受しようと思えるようになった。そんなある日、聖書に次のような言葉があるのを偶然見つけて、感動した（私はクリスチャンではない）。この数年間、私は何度もこの言葉を心の中でつぶやいて、自分を励まし、勇気づけてきたのである。

『苦難さえ誇りに思います。

苦難は忍耐を生み、

忍耐は練達を生み、

練達は希望を生むからです。

そして、この希望は人を裏切りません。

この希望は神の大いなる祝福だからです』

（参照 ロマ5,3-5）

完

スペシャル・オリンピックス

「医学がどんなに進歩しても、1%くらいの割合で生まれてくるという知的発達障害の人たち。この人たちは、その周りの人たちに優しさを教えるために神様からプレゼントされた人たちである」

身体障害者のための国際競技大会はパラリンピックとしてよく知られている。それとは別に知的発達障害者のためのスポーツ大会として、厚生省主催による国内大会「ゆうあいピック」と、世界中のボランティアによって運営される「スペシャル・オリンピックス」がある。

知的障害のある人たちは歴史的に隠されて育てられたという過去がある。が、彼らは周りが少しサポートするだけで驚くほどの力を発揮するという。絵でも音楽でもいいが、スポーツを通してやる気と勇気を育てようというのがスペシャル・オリンピックスである。スポーツをしていて、今までできなかったことがふとできるようになる瞬間を、だれでも経験したことがあるだろう。そこでうれしくなってまたやろうという気になる。知的障害のある人たちがスポーツを通して経験できる世界の広がりには計り知れない。今回はスペシャル・オリンピックス日本の会長を務める細川元首相夫人細川佳代子さんにお話をうかがった。

★ ★ ★

Q. スペシャル・オリンピックス(SO)にかかわるようになったきっかけは？

7年前に、熊本の中村勝子さんという元体操の先生とダウン症の女の子が、世界大会で銀メダルをとって帰ってきました。中村さんはSOの意義を身をもって体験して、ぜひこれを日本に広めたいと思い、私もボランティア活動をやっていたご縁でお手伝いをするようになりました。SOの基本哲学や実践活動を教えていただいて、今日本に一番欠けているものがここにある、これを広めたら日本の社会が変わる、これは単なる知的障害者のための活動というだけではなく、まさに世直し運動になると思ったのです。

Q. SOはどのようにして生まれたのですか。

SOを始めたのは故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバー夫人です。今でこそ障害者福祉先進国のアメリカですが、40年前は知的障害者が家族の中にいたら隠す、日本で言う座敷牢というような時代だったようです。ケネディ家には、大統領の妹でローズマリーという知

的障害をもった方がいましたが、大統領の父上はケネディ家の恥ということで娘を障害者として認めず、手術をすれば治ると言って手術を繰り返したので最後には廃人になってしまったそうです。それに対して、もう一人の妹であるユニスはお兄さんが大統領になったとき、「あなたもローズマリーのことを国民に隠すつもりですか。それではローズマリー・ケネディという一人の人間の尊厳、人権を否定することになりませんか。彼ら一人一人の命を、神様からいただいたものとして認めて受け入れ尊厳を守る、そういう社会を作るのが大統領の仕事ではないですか」と言ったんです。その勇気ある言葉でケネディ大統領はローズマリーのことを初めて国民に話しました。それからユニスは自宅の庭を開放して、それまで隠されていてスポーツをするチャンスなど絶対になかった知的障害をもった方々と、ボール遊びをしたりプールで泳いだりしたんです。そうしたら、スポーツの効果はすぐくて、何もできないと思われていた彼らが、教えればできる、それを楽しむ、どんどん上手になっていく。顔も変わり、元気になり、いろいろな面で非常に成長することがわかって、これをもっと広げていこうということになりました。

Q. SOの基本精神は「参加者すべてが勝利者」だそうですね。

はい。どんな子でもその子なりにがんばった分だけ誉めてあげます。ふつうのオリンピックでは、メダルへの期待のプレッシャーで青くなったりしますが、SOではメダルはいっぱい取れます。予選は、障害の程度がそれぞれ違うので細かくクラス分けをするためのものです。10%方式といって、その人の能力をチェックして、10%以内に入る人を同じ組にします。1組は3～8人と決まっていますので、そのレベルに9人いたら4人と5人に分けて決勝を行います。自然メダルの数は増えます。またSOでは表彰台は8位までなので全員がのって、最下位の子でも得意げにこぶしを振り上げたりしています。みんなの顔が笑顔で輝きます。

例えばスピードスケート種目に10m走というのもあって、短いですがね、10mって。それで

スペシャル・オリンピックとは・・・

知的発達障害のある人びと(アスリート)に、年間を通じてさまざまなスポーツトレーニングプログラムと競技会を提供する非営利団体。活動はすべて民間のボランティアの力と善意の寄付によって支えられている。国際本部はワシントンD.C.にあり、世界145カ国が加盟、125万人のアスリートを55万人を超えるボランティアの活動が支えている。

日本事務局：〒860-0845 熊本市上通町1-24
 ビアーレビル3F
 Tel: 096-352-4000 Fax: 096-352-1820

も転んでは起き、転んでは起きして何分もかかる子がいます。その子は1年前にはスケート靴をはいて床を歩くこともできなかった、それが頑張っって氷の上に立つことができ、初めは必死にコーチの手を握りしめていたのがだんだん1人で歩けるようになる。触って起こしたら失格になるから大会役員もさわれない。「頑張れ！」と観衆が総立ちで応援します。それでゴールをすると、その子がそこまでくるのにどれだけの道のりがあったかをみんなで考えて、心から拍手を送るんです。それは感動的です。

Q. 大会はすべてボランティアの手で？

そうです。昨年80カ国から約2000人のアスリートを集めて、冬季大会がカナダのトロントで行われました。オリンピックとあまり規模は変わりませんが、それが全部ボランティアの手で行われるんです。トロントでは6000人募集したら1万人以上の応募があつて断らなければなりませんでした。その会長は地元の37歳の銀行マン。日本ではみんなお役人さんでしょう。銀行はそれを名誉として、トロントで行われるとわかったときから毎年1カ月ずつ、準備のために彼に有給休暇を与えたんです。そういう風に社会全体がボランティア活動に熱心なので、こういう大会が可能になるんですね。

だからそのパワーはすごい。ほんとうにみんなが楽しんでいるので盛り上がり方が違います。日本では、形式的に見た目は素晴らしいし、全部時刻表通りにことが運ぶ。ところがSOはもういい加減。みんなボランティアなので連絡が悪くて待てど暮らせど迎えはこない、出発するまで選手の宿泊ホテルもわからない。それでもみんなボランティアだから文句は言えない。不平不満を言うより、自分に何ができるか、何をすべきかを考えて動く、みんなで作り上げていく、だから一人一人が主役です。みんなとにかく楽しんでいるからいいんです。

Q. 大会以外の日常のプログラムは？そしてボランティアの役割は？

各地で週末にさまざまなスポーツプログラムを実施しています。



スペシャル・オリンピックス日本会長細川佳代子さん

私たちの日本は、障害者を施設などに入れて隔離してしまいます。親が頑張っても社会が受け入れようとしない。劇場に行ったら二度と来ないでくださいと言わんばかり、レストランでもご遠慮くださいと言われる。社会に理解や思いやりがないから親はどこにも連れていけなくなり、自宅と学校あるいは作業所の往復で、言葉を交わす人間も親と先生ばかり。SOのボランティアはそういう人たちを毎週末、サッカーしましょう、水泳しましょうといろいろなトレーニングプログラムに誘いだすんです。SOを知ったアスリートは毎週水泳だ、ボウリングだとかけもちでやっています。一緒にスポーツをしているうちに本当に両方が学び合って、みるみるうちにイキイキとしてきます。できる種目も増えてきましたが、まだまだボランティアの数が足りません。ボランティアがそろって初めて成り立つ活動なんです。

Q. ボランティアが学ぶことも多いわけですね。

コーチをしようという人は最初、教えてあげようと張り切ってやってくるんです。ところが教えられるのは自分の方だったとみなさんおっしゃいます。ダウン症や自閉症、いろいろな出産期の異常で知的障害を負った人たちと一緒にスポーツをしていると、知的障害があるのは実は自分の方なんだと自覚するんですね。私たちは嘘をつく、何かあったときには自分の利益を考えて損になることは避ける、一方でこう言って裏では別のことを平気で言う。これらはみな知的障害だと思うんですね。その点彼らは純粋ですよ。優しく素直で正直です。どちらが知的障害か本当に考えさせられます。

今の日本は、とにかく能力のある子、偏差値が高い子がいい子になっている。社会に出れば学歴社会で、効率や能力が評価され、経済第一、利益第一の社会になってしまった。日本の価値観のルートから外れた子が、いわゆる非行や恐ろしい事件を引き起こしている。そんななかで、日本の福祉行政によって隔離収容されてしまった、知的障害をもった人たちを社会の中に引き出し、その子たちと何のご縁もなかった一般の市民たちとの交流の場をつくらう、彼らの本当の姿を理解することによって偏見や差別



第2回スペシャル・オリンピックス日本 国内大会表彰式

を取り除き、共に成長し、共に生きていこうというのがこの運動なんです。

Q. 日本の教育の問題になりますね。

金髪で頭のまん中にしか髪がない青年がコーチとしてやってきて、みんなでぎょっとしたこともあります。今では彼は黒いふさふさの髪になって目つき顔つきまで変わって、アスリートに最も人気のあるコーチです。彼は、自分は今まで間違っていた、親不孝の限りを尽くしてきた、それですべては親のせい、学校のせい、社会が悪いと全部人のせいにしてきた。誰も自分のことを認めてくれなかったけれど、僕を認めてくれるアスリートに出会って、毎週グラウンドで彼らに会えることが僕の生き甲斐になった。頑張って、頑張って、もうどこまでも頑張ろうと努力する姿を見て、自分はこれまでに一度もあんなに努力をしたことはなかった、ということを教えられたと言います。今の日本の偏った価値観からはずれた人たち、無気力、無関心、無感動という若者たちがアスリートに出会うと、人間にとって何が一番大事かという答えを自分で出すようになる、これはすごいことだと思います。

日本は強者の世界で弱者に光があたらないし、感覚的に言って、そういう基本的な心のあたたかさ、思いやりに欠けているような感じがします。いびつな価値観でがんじがらめになったから、教育の荒廃がここまで進んでしまったのではないのでしょうか。その子もっている何かしらの能力を、みんなで励まして引き出すような社会・家庭教育だったら、こんなにおかしな社会にはならなかったと思います。

Q. 福祉のあり方という観点から日本はどうですか。

ハードの面では結構進んでいますが、ソフトの面、心の面ではまだまだ遅れていますね。やはり一番の障害者福祉先進国はアメリカだと思います。障害者自立支援法という法律があり、障害ゆえに差別を受けた場合、それは法律違反になります。障害をもっている人ももっていない人も、同じ一人の人間として学校に行って、



バスケット決勝戦。一生懸命闘いながらも、チームメイトへのいたわりを忘れないアスリートたち。

社会で仕事をして、余暇を楽しんで、ちゃんと自立して生きていける社会を作るのがアメリカの法律の目的です。障害者が街に出て働いている姿がふつうに見られます。

知的障害をもった人たちは、人口の約1%は生まれてくると言われています。日本では100万人強ということになりますが、衛生環境や母親の教育などのおかげで実際はもっと少ないでしょう。厚生省にいわれる障害者手帳のような届け出があるのが41万3000人だそうです。日本ではまだ隠す意識が強い。隠されている数というのは全くわからないそうです。ですが夢中でこの運動に協力してくださる親御さんも増えていきますから、これからですね。

Q. ボランティアに興味があってもまず何をしたらいいのか、その第一歩が踏み出せない。

そういう方々にSOという活動があることをどうしたら知ってもらえるかという、やはりマスメディアしかない。ところが今までほとんど扱ってくれなかった。やはり日本の社会の封鎖性でしょうか。マスコミがナースです。親の方も、うちの子を写さないで、子どもの顔をテレビに出さないでと注文をつける人もいます。

みんな相手が知的障害をもつというだけで尻込みしがちです。どう対処していいかわからない。それほど、社会に知的障害者が出ていないということです。SOでは、自分が楽しむということを第一に考えて、とにかく一度足を運んでいただきたいと思っています。いろいろな人に出会って人生観が変わって、そして揉まれていくうちにみんな豊かな気持ちになって、いわゆる共生、みんなで支え合って共に生きていこうという理想の社会ができるのではないのでしょうか。とにかく来てみてくださいとお願いしているんです。見てくださればわかりますと。

★

来年の夏、米国ノースカロライナ州でSO夏季世界大会が行われる。世界大会に選手を送り出す条件ともなっている国内大会は、記録的な大雨が関東以北の各地で大きな被害をもたらした今年の8月末、神奈川県平塚市の東海大学湘南校舎で行われた。アスリート300名の他に、大会役員、コーチ、一般ボランティア約2400名が参加した。大会の当初の予想を上回る、多くのボランティアが集まった今大会。あいにくの天候にもかかわらず、多くの人々の熱い声援と、アスリートたちの頑張りが一つになって大会を盛り上げた。

出会い (7)

ダブルパンチ

奥村 一郎

「キリスト教を体で知るためには洗礼を受けなさい」という思いがけない言葉を与えられて、中川宋洲老師にいとまごいをしたものの、実際にどうしたらよいものか、すぐには分からなかった。しかし、カトリック教会での洗礼のためには、「公教要理」(現在では「カトリック要理」といわれる、問答様式にまとめられた神学の縮刷版)に基づいて勉強をする必要があることは知っていた。ところで、その本にもまた、残念ながら、わたしにはよい思い出がなかった。例の聖書研究会を始めた頃、わたしをカトリックに導こうとした熱心な老婦人から手渡されたのが、その「公教要理」であった。聖書の場合も、初端から讀いてしまったように、この本の場合も同じ。

まず緒言からして問題。．．。宗教は人の道を完うし、完全な幸福を得るために是非必要であります。しかし、どんな宗教でもよいというわけではなく、唯眞の宗教によってのみ、その目的を達することができます。そして、天主は御一体、真理は一つ、人の眞の道も一つでありますから、眞の宗教は唯一つあるのみであります。その上、天主に対する人の道は、人が自由に決めることではありませんから、眞の宗教は天主の啓示し給うたものでなければなりません。幸い天主は人々に眞の宗教をお示しになりました。

禅仏教に熱中していた当時の若い学生時代のわたしにとって、上記のような、キリスト教だけを「唯一の眞の宗教」であるという主張は全く受け入れられなかっただけでなく、その宗教的傲慢に堪え難い憤りを覚えた。このことは、拙稿「出会い」の今までの経過をご存じの方には十分推測していただけることと思う。

次に、第一課 人の目的：人は何のために、この世に生まれてきましたか。

人がこの世に生まれてきたのは、天主を知り、天主を愛し、天主に仕えて、ついに、天国の幸福を得るためであります。

この答えは、一瞬、わたしの心のなかに複雑な波紋をつくった。生まれること、そして生き

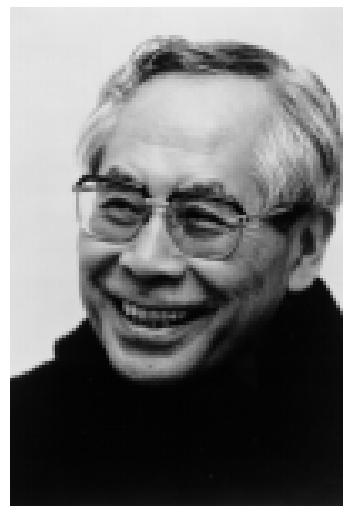
ること、愛すること。．．。まさに、人生の「大疑問」が、冒頭に取り上げられていることには、強い印象をうけ、共感を覚えた。だが、それに比して、答えの簡単さにあきれかえった。一生問いかけても答えのない、人生の最大の課題を、わずか、一行の答えで片付けられているのに愕然とした。宗教的大天才、釈尊にしても、その問いに六年にわたる瞑想を続けなければならなかった。達磨大師の「面壁九年」もしかり。

旧制一高時代に知った藤村操の有名な「巖頭之感」も忘れられない。当年わずか十七才の若さで人生とこの宇宙の神秘を問うことに命をかけた真剣な哲学青年の自死の物語は、今も向陵自治寮史に不滅の記録として残されている。

悠々たるかな天壤。遼々たるかな古今。五尺の小軀をもってこの大をはからんとす。ホレーショの哲学、ついに何等のオーソリティに値するものぞ。万有の真相は唯だ一言にして悉、曰く、「不可解」。我この恨を懷いて煩悶終に死を決す。すでに、巖頭に立つにおよんで胸中何等の不安あるなし。初めて知る、大なる悲観は大なる楽観に一致する。

日光華嚴の滝の傍らにあった桜の幹を削り、墨痕鮮やかに書き残された壮絶な人生の苦悶は、少なくともわたしと同世代の日本人なら、その心の奥深くに響いてくるものがあるのではなかろうか。

このような時代にあった当時のわたしにとって、「公教要理」の説明は、全く、実も花もない愚答でしかなかった。正しいとか、間違っているとかの次元ではない。誰にとっても、人生は考えれば考えるほど深い神秘であるはずなのに、余りにも簡単に整理してしまう要理の割り切り方が情けなかった。血も涙もない干からびた言葉。「正解であるとしても眞実ではない」。そこでは、知性の論理と心情の論理とがかみ合わない。「複雑な心の波紋」と言ったのはそのことである。長年にわたって悪戦苦闘した聖書の場合とは別の文化的違和感に由来する蹟きであった。まさに、カトリックにダブルパンチを喰わせた、否、逆に喰わされたともいうのであろうか。



奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

ともあれ、この二つの大疑問、「眞の宗教とは？」と、「人生とは？」という問いは、受洗後五十年になる今にいたるまで、形を変えてわたしの魂の奥深くに棲息している。現代神学ブームとなりつつある、「宗教対話」や、「福音と文化」という課題は、わたしにとって、キリスト教との衝撃的な出会いのうちにすでに端を發した永遠の課題であった。

子供要理教室：

例の反キリスト論を書き上げた頃は、高円寺の友人の家をでて大森の下宿に移っていた。中川宋洲老師をお訪ねした時も、そこから三島の龍澤寺に出かけた。それまで、頭ばかりで、気が狂ったかのようにキリストを追いつめていたのが、老師の一言で、突如、ひっくり返ってしまった。それから、また、しばらく呆然として二カ月ほど時がたつうちに、静かに心の傷口が癒され、キリストに激しく挑んだ自分の身の程知らずの知的傲慢を痛いほどに感じ始めた。

その頃ふと、どこからか、確かなひとつの聲が聞こえた：教会に聞け。その時、「教会」という言葉の意味がすぐに掘めなかった。はつきりとしているようで、何か広く漠然としていた。とにかく、地図をみると、下宿に近い大森教会があることが分かった。うろろうしていても仕方がないと、腹を決めて、紹介状もなく、見ず知らずのその教会を訪ねることにした。戦後三年目、司祭館といえるようなものではなく、米軍払い下げの「かまぼこ兵舎」。太い針金でしばったドアを叩くと、神父が出てこられて、自分の立ち話。「公教要理を教えてくださいのですが、．．。」というと、「うん、いいぞ。次の木曜日の朝、九時に来い」、「はい」と一言できる。

お知らせ：10月11日（日）NHK教育テレビ7:30AM「こころの時代」に奥村神父様出演され、祈りと生活についてお話しされる予定です。（編集部）

それが、数年前に帰天された恩師、「われらのおやじ」の名で知られた下山正義師であった。

ところで、その日、約束通り出かけていくと、数人の子供たちが部屋の中をかけまわって遊んでいる。九時。下山師が入ってこられる、子供たちはピンポン台を囲んでパタパタと腰掛ける。何が始まるのか分からないままに、私も彼等と一緒に並ぶ。まず短い祈り。それから、約二十分ぐらいの話で終わり。解散。急いで子供たちは飛び出していく。私は一人取り残されてガララとした部屋にしばらくひとりぼっち。狐につままれたように。それが最初のレッスンであった。行くところもなく、隣の建築中の聖堂に入って、一時間ほど祈るともなく、静かに思い巡らしていた。当て外れであったことはいうまでもない。しかし、なぜか、騙されたような気にもならず、憤懣も感じなかった。その時の話は全く子供向きの話。わたしには、なんの興味もなく、為にもならない事ばかりであったのは言うまでもない。ところが、奇妙なことに、その子供用の話を何回も繰り返し聞いているうちに、なにか、バック・ミュージックのように心地好くなり、そのあいだに、いくつも頭に浮かんでくる、神学の難問がブルドーザーでどんどん整理されていくように思われた。それから、子供要理教室が楽しくなってきた。それに、子供たちと遊ぶのも楽しかった。「幼子のようにならなければ天国に入れない」というキリストの福音的教育法であったのだろうか。とにかく「公教要理」の講義らしきものは、一度も教えられないままに二カ月ほどの時が流れた。自分で読み直したり、個人的に質問をして話し合ったりするうちに、いつの間にか頭と心とが整えられていった。

「^{まろし}^{すえ} 蠅の齋よ、回心せよ！」*と、下山師が後ろからわたしの肩を叩かれたのは、その頃であった。ところで当時は、受洗のためには、一応、筆記試験を通らねばならなかった。下山師の部屋の中で答案を書かされた。「第一問 神の存在を論証せよ」。調子に乗って、十数枚びっしり書いたことを記憶している。ところが、第二問 聖母マリアの被昇天の日は何日か？理屈っぽいことは得意であるのに、幼稚園児でも知っているこんな簡単な問題となるとお手上げ。不意をつかれた感じ。さて、そばの机を見ると「公

教要理」がおいてある。悔し紛れにカンニングと決めた。それも、受洗前の罪は、洗礼によって、すべて許される、という都合のよいカトリック要理の教えを思い出した。「マリア様おたすけを！」と願いつつ、滑り込みセーフ。とにかく、学生時代には、プライドもあって、一度もしたことの無いカンニングをやったのけた天国泥棒。1948年12月12日（無原罪聖母公式祭日）、大森教会で下山正義師により受洗。

下山師は、わたしの受洗のための試験のことで、皆に、いつも、ヘンな自慢をしておられた。「オレ、あいつの答案に落第点をつけてやった。やたらと長く書きよったからな、アッハッハ...」第一問の「神の存在についての論証」のことだった。カンニングのことなどはどこへやら、まったく頭になかったらしい。ともかく、ちょうど50年前の洗礼という出来事が、やがて、全く予期しない人生の方向を生み出していくことになった。

*参照 ルカ3,7-9

表紙の写真

奥村光也作品「Angle of Silence」



奥村光也（おくむら・みつや）

1951年東京生まれ。武蔵野美術大学卒業後、渡米。サンフランシスコ・アート・インスティテュート大学院写真科卒業。1978年に拠点をニューヨークに移し、コマーシャル・フォトグラファーとして活動を始める。主な個展に「Angle of Silence」「Arches」（いずれもP.G.I.で開催）がある。ニューヨーク在住。

Emmet Gowin

エメット・ゴウウィン 作品展



“Recent Work”

1998年10月15日（木）— 11月20日（金）

エメット・ゴウウィンは、70年代半ば、妻やその家族を神秘的な映像でとらえた作品を発表して以来、現在にいたるまで高い評価を受けているアメリカの写真家です。その後、風景写真に取り組み、さらに単なる風景から地球という大きな対象へと視点を広げていったゴウウィンの作品は、息をのむほどの造形的な美しさをたたえ、人々の心に深く語りかけられます。本展示では、近作のモノクローム作品30余点を展示します。

フォト・ギャラリー・インターナショナル（虎ノ門）
月～金 11:00 am～7:00 pm
土・日・祝日休館 入場無料
東京都港区虎ノ門2-5-18
Tel 03 3501 9123



P.G.I. 芝浦
川田喜久治 作品展 “Car Maniac”

1998年11月11日（水）— 12月19日（土）
月～金 11:00 am～6:00 pm
第2・4土・日・祝日休館 入場無料
東京都港区芝浦4-12-32
Tel 03 3455 7827

ブルゴーニュ利き酒騎士団のすべて

横山 弘和

ここに、La Confrérie des Chevaliers du Tastevin (コンフレリー・デ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン) というたいへん難しい名称があります。このなじみのないフランス語を分析してみましょう。コンフレリーとは主に宗教、慈善関係の団体を意味し、この場合ワインの普及推進団体を指します。シュヴァリエは騎士(英語のナイト)。タートヴァンはワイン試飲用の小さなカップです。ブルゴーニュでは銀製の、光を反射させてワインの色を見るために、カップの底に凹みがついています。従ってこの名称は、日本語で正確には「ブルゴーニュ・ワイン利き酒杯の騎士団」ということになるでしょうか。この団体が、ワイン王国フランスの数多いワイン産地に存在する普及団体の中でも、際立って規模が大きく国際的によく知られるブルゴーニュのワイン・ソサエティーなのです。

この団体の歴史は古く、ジョルジュ・フェヴレとカミーユ・ロディエという2人のすぐれた人物の提唱によって、1934年に創立されました。当時、世界はまだ大恐慌の後遺症から立ち直れず、特にヨーロッパは、ナチスやファシストの台頭もあって今にも戦争になりそうな怪しい雲行きでした。当然ワインの売れ行きは極端に悪く、加えて皮肉にも1934年のぶどうの収穫量が非常に多かったため、ブルゴーニュの酒蔵は在庫でいっぱいになってしまいました。そのような状態のなかジョルジュとカミーユの2人は相談して、誰も我々のワインを欲しがらないなら、いっそ友達を呼んで一緒に飲んでしまおうということになりました。これは破れかぶれの心境から生まれた団体だったのです。こうして同年11月16日土曜日、ニュイ・サン・ジョルジュの酒蔵カヴァー・ニュイトンで記念すべき第一回の集會がもたれます。そのとき以来、この団体はブルゴーニュ地方のワインだけでなく、古い歴史、すぐれた文化、美味しい郷土料理、そして何よりも陽気で人情味豊かなフォークロアの紹介に力を注いできたのです。その後、集會は由緒あるシャトー・ド・ヴージュで行われるようになりました。これは、12世紀初頭、シトー会の修道士がヴージュ村に修道院や教会を建てその周囲にぶどう畑を作った際、発酵室、貯蔵庫として建てられたもので、16世紀の改築を経て現在に至る

フランスの国家的重要建造物です。第2次世界大戦も終わりに近づいた1944年11月29日には、彼らはこの建物を買い取って正式に本部として所有することになりました。

今日、コンフレリー・デ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァンは世界中に約11,000名の会員をもち、フランス人約50%、次いでアメリカ人約20%、日本人を含むその他が30%というメンバー構成です。会員の職業、経歴は多種多彩で、国家元首、政治家、外交官、軍人、宇宙飛行士、企業家、芸術家、音楽家、俳優、医師から、ワイン取引業者、料理人、ソムリエに至るまで、それぞれの分野で活躍するブルゴーニュ・ワイン愛好家の男女が顔を揃えます。会員2名の推薦と書類審査によって会員になることができます。新会員はクロ・ド・ヴージュで毎年十数回開かれる例会のいずれかに出席して叙任を受けます。会員の証として与えられるのは、深紅の地に黄金色の線が入った美しいリボンのついたタートヴァンです。リボンの深紅は赤ワインを、黄金色は白ワインを象徴しています。4種類のリボンは意匠が異なり、GRAND-OFFICIER、OFFICIER-COMMANDEUR、COMMANDEUR、CHEVALIERという4つの位を表しています。

クロ・ド・ヴージュでは年間16回から18回の集會及び大晩餐會が開催されます。1998年の今年は16回で、下のような日程になっています。

それぞれの集會につけられた名前は季節感を感じさせ、いかにも楽しそうです。これらの会



横山 弘和 / よこやま・ひろかず

1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商会ヴィタリテ事業部在籍。

のうち、1月のサン・ヴァンサン(ぶどう栽培者の守護聖人)の会と、11月の栄光の3日間は、特別な年中行事として最高の盛り上がりを見せます。

さて、日本のシュヴァリエ・デュ・タートヴァンの活動はどうか。テレビで活躍された兼高おかるさんは、ごく初期に叙任されています。また、歴代のフランス駐在大使使も叙任されてきました。1970年後半から80年代、日本のワイン消費の急激な伸びに伴いブルゴーニュ地方との交流が広がり、大手の洋酒関連会社の経営者や幹部が叙任され、さらにレストラン経営者やワイン・ジャーナリストの叙任も増えました。90年代になると、医師や音楽家、写真家など芸術分野で活躍される方々がこれに加わり、ブルゴーニュを愛する人々の輪がますます広がっていきます。そんななか1995年1月28日、



デザイナーの森英恵さん。歌手のシルヴィー・ヴァルタンさんも1998年5月に叙任。(撮影：飯山翔)

Chevaliers du Tastevin 1998年集會日程

1月24日(土)	SAINT-VINCENT TOURNANTE à RULLY	サン・ヴァンサンの会
4月4日(土)	CHAPITRE DU RENOUVEAU	春の訪れの会
4月18日(土)	CHAPITRE DES TULIPES	チューリップの会
4月24日(金)	CHAPITRE DE PRINTEMPS	春の会
5月9日(土)	CHAPITRE DES PREMICES	初穂の会
5月16日(土)	CHAPITRE DES ROSES	バラの会
6月6日(土)	CHAPITRE DE LA VIGNE EN FLEUR	花をつけたブドウの会
6月13日(土)	CHAPITRE D'ÉTÉ	夏の会
9月26日(土)	CHAPITRE DE L'EQUINOXE	秋分の会
10月3日(土)	CHAPITRE DES VENDANGES	収穫の会
10月17日(土)	CHAPITRE D'AUTOMNE	秋の会
10月24日(土)	CHAPITRE DES SARMENTS	若枝の会
11月7日(土)	CHAPITRE DE LA GASTRONOMIE	美食の会
11月14日(土)	CHAPITRE DES TROIS GLORIEUSES	栄光の3日間の会
11月28日(土)	CHAPITRE DU PRIX DU TASTEVIN	タートヴァン賞の会
12月12日(土)	CHAPITRE DE LA SAINT-HUBERT	サン・テュベールの会



1995年度シュヴァリエ・デュ・タートヴァン・ジャポン総会

待望の日本支部が誕生し、発会式と第1回の集会在明治記念館で開催されました。現在約80名の会員を擁する日本支部は、毎年7月に総会、12月に「ブルゴーニュのクリスマスを楽しむ会」を開催し、会員とそのゲストの参加でにぎわいを呈し毎回好評を得ています。これらの会には、フランス本部からやってくる幹事長や長老に加え、カデ・ド・ブルゴーニュ（ブルゴーニュ合唱団）のメンバー数人が出席し、美しいワイン賛歌の数々を見事なハーモニーとユーモアあふれる快活さで歌い上げ、観衆を魅了してくれます。尚、本年からこれら2回の会に加え、カジュアルで気軽な立食形式の集会をもつことになりました。この会では会費とは別に、お気に入りのブルゴーニュ・ワインを1本持って参加することが義務づけられています。ちょうど栄光の3日間の月曜日にシャトー・ド・ムルソーで開かれる午餐会（ラ・ポーレ）のように、お互いにワインを勧め合って楽しもうというのが狙いです。

Tastevinageタストゥヴィナージ 騎士団認定のワイン

シュヴァリエ・デュ・タートヴァンの重要な定期的活動の中に、優秀なブルゴーニュ・ワインの認定という仕事があります。ワインの生産者及び仲買兼熟成業者*から提出されたワインのサンプルを試飲して、規定以上の品質と認めたワインに騎士団お墨付きともいえる特別のラベルを与えます。こういう形でブルゴーニュ・ワインの品質向上を後援しているのです。

この試飲会は年2回行われ、春には赤ワイン、秋には白ワイン、スパークリング・ワイン、ポジ

ヨレーが審査されます。審査員は、政府の公正取引関係の役人から醸造学者、レストラン経営者、ワイン・テースティングに造詣の深いアマチュアなど、主に外部の人々250人が務めます。公平に審査され合格したワインには、認定年、認定番号、認定スタンプの付いた特別のラベルが貼られます。量は多くありませんが、日本にも輸入されているのでどうぞお試しください。

シュヴァリエ・デュ・タートヴァンの宴会では、ステージの上に必ず、

JAM^{アン}AIS EN V^{ヴァン}AÏN
(決して・ない) (むなしく・むだに)
TOU^{トゥ}JOURS EN V^{ヴァン}IN
(いつも) (ワインと共に)

と書かれたワインカラーの垂れ幕が飾られます。ワインさえあれば決してむなしいことはないーこれがこの会のモットーです。

* ワイン仲買兼熟成業者 négo^{ネゴ}ciants-élev^{エル}eurs : ブルゴーニュ・ワインを知る上で、このネゴシヤン・エルヴールの存在を理解することが一つのキーになります。

ブルゴーニュ・ワインの今日に至る長い歴史の中で、フランス革命の影響で始まった大きな変化があります。この革命により、教会と貴族階級の広大な土地が、没収され、「国有財産」として競売にかけられ、細かく分割されたのです。加えて、畑は長男だけでなくすべての子供が継承権をもつとするフランス相続法によって、畑の細分化に拍車がかかりました。こんな理由から一人の生産者のもつ畑の面積はきわめて小さく、収穫した新酒を1年半から2年も樽貯蔵して自家瓶詰めをするには、量が少なすぎて効率が悪く、資金繰りも難しくなります。そこでブルゴーニュ地方では、18世紀の前半から、ワインの熟成、販売、輸出を一手に引き受ける職業が生まれ繁栄してきました。フランスの他のワイン産地に比べ複雑なワイン取り引きに、この地の伝統あるネゴシヤン・エルヴールの存在は欠かせません。

★

シュヴァリエ・デュ・タートヴァン・ジャポン理事会
名誉会長 内田宏（元駐仏大使）
会長 伊藤恒（元ホテルニッコー-U.S.A.社長／現トラベルジャーナル旅行専門学校校長）
専務理事 佐多保彦（（株）東機質社長）
理事 山本博（弁護士）
中上スミ子（（有）スイスシャレー社長）
小阪田嘉昭（メルシヤン（株）ワイン技術部長）
藤本義一（元サントリー宣伝部／ワイン相談室長）
（敬称略・順不同）

シュヴァリエ・デュ・タートヴァンにご興味のある方は、下記事務局までご連絡ください。（担当：岩沢）
〒106-8655 港区東麻布2-3-4
Tel 03-3582-5087
Fax 03-3586-5042

出版のご案内



フランスの中心
ブルゴーニュ
歴史と文化

齋庭孝男 編

ヨーロッパの十字路「ブルゴーニュ」の魅力

ワインの国の歴史と宗教、文化、産業、経済、そして食と祝祭etc、現地からの特別寄稿と6人のフランス文学者による初の本格的なブルゴーニュの案内書です。

小沢書店刊 定価（本体3200円＋税）
全国の有名書店で買い求めください。



Château de Chaillay / シャトー・ドゥ・シャイイ

ブルゴーニュへ、ようこそ
中世がいまだに息づいている
ブルゴーニュへいらつしやいませんか。
数々の銘酒を生み出すぶどう畑、
グルメレストランの数々、中世そのままの街なみ、
美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力と「はだのぬくもりを感じる地方、
それがブルゴーニュです。」



お問い合わせ

（株）佐多商会ヴィタリテ事業部 担当：岩沢

Tel. 03 3582 5087